研究所通信

2011年はる号

藤田佳代舞踊研究所

神戸東灘区住吉本町1-4-4
TEL・FAX　078-822-2066
E-メール　fkmds@muf.biglobe.ne.jp
URL　http://www2s.biglobe.ne.jp/~fkmds/
JWORDで検索するなら・・・ﾓﾀﾞﾝﾀﾞﾝｽjp

みにきてください！！　創作実験劇場

11月にかじのり子モダンダンスリサイタルが終わって、一ヶ月後からリハーサルがスタートしました。12月23, 26, 27, 28日それから年明けて1月4, 5, 6日と、必死でした。リハーサル期間は短いのですが、仕上がりの手ごたえが感じられるようになってきています。今回のルナホールは客席数が多くそれなのにあまりチケットが出ていない状況です。あと130人の方に観に来ていただけると助かります。出演者も必死にチケットを売ってはおりますが･･･。みなさん、どうぞ観に来て下さい。よろしくお願いいたします。

2011年2月26日(土)5時30分開演　芦屋市民センター　ルナホール

出演　寺井美津子　金沢景子　菊本千永　かじのり子　向井華奈子　灰谷留理子　石井麻子　藤木絵里香　山田麻以　萩原陽子　松浦早希　重友理帆
平岡愛理　田中彩加　田中文菜　稲益夢子　渡辺草平　雲井綾音　三木涼音　末吉花林　菊原麻理奈　渡辺菜子
出品　藤田佳代　寺井美津子　金沢景子　菊本千永　かじのり子　向井華奈子　灰谷留理子　萩原陽子　重友理帆　平岡愛理

おどるあほう
父親の出身地は徳島。「えらやっちゃ～　えらやっちゃ～　ヨ～イヨイヨイヨイ　おどるあほうにみるあほう　おなじあほならおどらにゃソンソン！」のフレーズを幼い時からよく聞かされていました。実際、阿波踊りを目の当たりにした時は圧倒され、連の後ろをおどりたいけどはずかしく、ちょろちょろついて回るのが精一杯の低学年の私でしたが。今になって、“おどるあほう”？？･･何か社会に役に立つことをしているわけでもなく、誰かのために何かしているわけでもなく、ただレッスンしておどりに明け暮れ、まわりの人には「おどりって楽しいよ～、だからここに来ていっしょにおどろーよー！カラダを動かすだけでも気持ちいいよ！おどらなソンだよ！おどらないならどうか観にきて！」と誘っているわたしのことやん！！！てなわけで「おどるあほう」を創りました。　金沢景子

冬の夕闇
例えば一本の樹は、空と大地をつなぐ一本の管になり、闇は空からその通路を通って影となって大地に降り立ちます。闇はあらゆるモノを通って私たちのもとにやってきます。木の影は長くいびつな形に伸びていき、いつしか他の影と混ざり合い、溶け合って広がってとろみがつくようにその濃度は増していきます。私は踊りの中でその影をかき混ぜて、混ぜ込んでより濃い、濃い闇をつくろうとしています。
『冬』の語源は『増ゆ』だという説があります。そしてそこで蓄えられたものが張っていく、つまり『張る』のが『春』であると言います。ある染色家が言うには、冬のまだ花も咲かない時期の固くしまったような桜の枝から煮出して布を染めれば、なんとあの桜色に染め上るのだそうです。逆に花が咲いてからではあの色はもう出ないということです。冬といえばいかにも光と色彩に乏しいイメージがありますが、実はすでに桜色のようなあの繊細な色はこの時期に準備され、存在しているのだと考えれば、冬の闇とは、春の一挙に吹き出す様々な色が混ざり合った色彩豊かなものだということができるのではないでしょうか。そして、そこから一つ一つの生命の色として私たちのもとに導いて来てくれるのは春のあの光です。
どのような方向から、どのような強さで光がさすのか全くわからないし、照らし出された時にそれがどのような色になるのかも見当がつきませんが、いつかやってくる光のために今は闇をひたすら練り上げていきたいと思います。　萩原陽子

人形　アノコノシアワセイノッテル
阪神･淡路大震災で、私の住んでいたマンションは、全壊判定を受けたのですが、それはガスや給湯がもう直せないからという理由で、建物はしっかり建っていました。荷物は何も苦労しなくても取り出すことができました。居を移すために、私が荷物を取りに戻ったのは3月過ぎ。洋服や本やCDを取り出して運び、あ！お雛様も持っていかなくては、でもこれは最後に、とお雛様は玄関に置いて、そのままもちだすことなく出発してしまったのです。3月過ぎでしたので、お雛様の事を思い出したのは次の年の3月でした。マンションが壊されて、瓦礫となって運び出されるその中で、お雛様はどんな思いでいた事か。もう一度私が家まで戻っていれば、気がついた事なのに！それでいて副題に、アノコノシアワセイノッテル、とは図々しい話とは思いますが、いやきっとそう思ってお別れしてくれたのだと、信じて踊りを創りました。あの震災ではこんな切ない別れは多くの人が経験した事でしょうし、お雛様の側からの切ない別れもたくさんあった事と思います。　菊本千永

en
今回もなかなか進まず、先生方に大変ご迷惑をおかけしました…。普段、何気ないふとしたことにも縁を感じることがありますが、今回は主に人との縁、ゆかり、えにしに思いを馳せています。今まで出会った人、誰一人欠けても今の自分はない。一つの縁が終わり、次へ繋がっていく、サークル(円)のようなイメージもあります。終わりがあるから始まりがある。…やりだしてから、とても難しいテーマだ…と苦労しました…。　灰谷留理子

はないちもんめなんて大きらい
“はないちもんめ”って　なんかきらいやなぁ、何でやろう？　と思っていました。
思い出したんです。“～ちゃんがほしい”っていうあのフレーズ。私の名前はついに呼ばれず終い。“えーっ　わたしってはずされてるの？友達と違うん？”結構ショックでした。
それ以来、高校生になるまで　何となくみんなの輪からちょっと離れて友達をみるようになっていた気がします。
それでも、引きこもることもなく一緒に遊び、喧嘩し、ぶつかり合ってきました。一人ではなく人の間に生きることで明日を見いだす、たいそうなことを言ってますが、つまりは、ふれあう程度では人ってわからんなぁ、ぶつかってみないと　と思っています。
この唄、人身売買のうたと言われています。この底流にある意味が、一層私に“きらい”という感情を起こさせるのかもしれないとも思っています。　寺井美津子

kemuri
今回の作品は　私個人的に実験(?)挑戦(?)です。
今まで私の踊りは素材があっての創作だったのですが　今回は動きを素材化し踊りにしています。これは今まで私のなかにはなかった創作へのアプローチです。
タイトルにある kemuri は特別な煙のこと。kemuri はこの世にある形あるものの最期の姿であり　空へ溶けて消える　あの煙です。
16年前の1月17日神戸の町も kemuri となり空へと溶けました。祖父が亡くなったときの火葬場でみた kemuri もそうでした。
この世から消え去ることをただ悲しむだけではなく　あきらめることを諭すものでもありました。皆　最期は kemuri となり　私もまた　そうなるのだと。　向井華奈子

流れ
今回「流れ」という作品を、萩原・重友・平岡の三人で初めて作らせてもらいました。この作品は、龍の三つの流れをイメージしています。初め、一つの塊が三つに分かれて、流れ出します。そして反発や調和を繰り返しながら三つの力をより合わせ、最終的に、大きな力を作り出していきます。やがてその力は分散しそれぞれの方向へと昇華していきます。三人での創作ということもあり、意見が合わなかったり、まとまらないこともありました。でも試行錯誤を繰り返し、先生方にも助言を頂き、何とか作品としてまとまってきました。この作品の中で、年少の私を先輩二人が引き上げてくれました。この作品のように三人で力を合わせ、私たちにしかできない踊りをしたいです。是非楽しんで観てください。
平岡愛理

「流れ」という作品を萩原陽子ちゃんと平岡愛理ちゃんと三人でつくりました。この踊りのイメージは竜です。一つの塊が分裂して三匹の竜が生まれ、自分の流れを作っていきます。対立したり調和したりして最後はそれぞれの方向へと昇っていく、という踊りになっています。三人で意見を言い合い踊りに反映し、また一からやり直しをしていくのを繰り返し、みんなの想いの詰まったものになりつつあります。佳代先生には多数の助言をいただき、創作の壁に当たったときには大いに励みになりました。特に創作実験劇場は初めての出演でしかも自分たちの振り付けで踊るのも初めてなので今までとは違う緊張感があります。まだまだ未熟ですがたくさんの人に観ていただきアドバイスをいただけたら幸いです。
重友理帆

遊びをせんとや生まれけむ
好きな歌があります。
遊びをせんとや生まれけむ 戯(たはぶ)れせんとや生(むま)れけん 遊ぶ子どもの声聞けば 我が身さへこそ動(ゆる)がるれ (梁塵秘抄)
昨年7月に大阪で親に置き去りにされた幼い姉弟が遺体で見つかりました。子供は遊ぶために生まれてきた と思います。決して死ぬためだけに生まれてきたのではない と。
今回の作品では 紙飛行機がどこまでも高く遠く飛ぶことを願う気持ちを踊りにしました。
すべての子供たちが心身ともに安心して広々と遊べることを願います。
かじのり子

今日のこの空 ほしいひと一さいしょはグー
作品を 1 彩の世界 2 黒の世界 3 白の世界 4 青の世界の4章に分けました。
1は生命あふれる子供たちの世界。この空ほしいとじゃんけんします。2は闇の世界。黒雲に覆われた空のイメージです。3の世界は白雲のイメージです。4の世界は かすみはれ みどりのそらも のとけくて あるかなきかに あそふ 糸ゆふ (和漢朗詠集) 。この歌の青空のイメージです。音楽は、1 三味線 2 尺八 3 箏 4 コカリナの日本独自の楽器で演奏されている曲で振付ました。「人間は毎日一度は空をみあげて心をひろびろと開くこと」という地球憲法をつくりたいのです。
藤田佳代

おわりました！ありがとうございました

かじのり子モダンダンスリサイタルIII　2010年11月23日　神戸アートヴィレッジセンターKAVCホール

Grab it !一つかまえろー (サクソフォン演奏 西本淳)　石の魚　ぼくたちのアジール　コピー　どこへいくの
うたう (構成・演出・作舞 藤田佳代　作舞 寺井、金沢、菊本、かじ、向井、萩原)
出演　寺井美津子 金沢景子 菊本千永 向井華奈子 灰谷留理子 石井麻子 板垣祐三子 萩原陽子 仲間くみ子 松浦早希 重友理帆 西田梨緒 平岡愛理 谷岡亮 田中文菜 谷岡みなみ 田邉さつき 谷岡このみ 稲益夢子 かじのり子

昨年11月23日(火祝)に お陰様でリサイタルを無事終えることができました。ありがとうございました。
初の二回公演でした。来客数は昼は250人で 立ち見がでるほどに！夜の部は150人でゆったりと。当日はゲネプロを含むと三回もプログラムを踊りました。不思議と疲れも怪我もなく あっという間に一日が過ぎ去りました。
終演後 神戸新聞社の金記者が取材に来てくれました。「終えての感想は？」と聞かれ「楽しかったー！！」と我ながら大人気ない答えしかできず、案の定 次の日の記事に私のコメントは載っていませんでした。
それでもやっぱり、創って 踊って 楽しかったです！また創り 踊りたいと思います。皆様、本当にありがとうございました。
かじのり子

リサイタルは3回目、新旧6作品を並べた。旧作の「コピー」は、自分が誰かのコピーかも知れないという現代人的な不安と格闘する。共演の菊本千永との白熱ぶりは見ものだった。新作「どこへいくの」は舞踊になりそうにない呼びかけが動きに発展する。宇宙論に似てしまったのは巧まざるユーモアだ。
彼女の作風は日常の些細な目の付けどころが、人生を再発見していく方向に繋がっていくのが面白い。好奇心が強いのだろう。音楽がよく吟味され「Grab it !」の西本淳のサックスは素晴らしかった。
白石裕史 (Classic Note 2011年 1月1日号)

日常と自然見つめる かじのり子モダンダンスリサイタル
藤田佳代舞踊研究所かじのり子の三度目のモダンダンスリサイタル。五作品を発表したほか、師の藤田佳代構成・演出・作舞による「うたう」でも同門の五人と共に作舞と出演を手がける。サクソフォン (西本淳) の演奏も含む多彩なステージを見せた。「Grabit～つかまえろ」「石の魚」「ぼくたちのアジール」等群舞作品のほか共通のカーキのつなぎで菊本千永とデュエットする「コピー」、吉松隆の曲で自問自答するようなソロ「どこへいくの」が印象的だ。自然でスポーティーな動きの積み重ねと、Tシャツにパンツなどシンプルな衣装で人や生きものたちの日常と自然をみつめるまなざしがかんじられた。最後の藤田作品「うたう」は百人一首の中の六首に振りつけられたもの。素足で床を踏みしだいて踊る素朴でエネルギッシュなダンスの構築に、この舞踊団の挑戦する強みを感じさせた。
谷孝子 (週刊 オン★ステージ新聞　2011年1月7日号)

2010ピッコロフェスティバル 2010年8月15日　ピッコロシアター大ホール
風の戯え　萩原 松浦早希 重友 平岡 西田 姜 田中文菜 松浦有紀
月は戻らぬ　向井

第32回藤田佳代舞踊研究所発表会　2010年 10月10日 神戸文化大ホール
カンナの森　わたしといきもの仲間たち　出演　藤田佳代舞踊研究所研究生

兵庫洋舞フェスティバル ふれあいの祭典 2010年10月9日 神戸文化大ホール
帰る あの木のところへ　一滴の雨粒の2000年の旅　出演 寺井 金沢 菊本 かじ 向井 萩原 松浦 重友 三木涼音

昨年のはる号を出して以来、目の調子が悪くてしばし休刊しておりました。また、続けていきますので読みにくい字ですがお読みください。昨年の発表会では、舞踊評論家の村山久美子先生がお見えになり、とてもよかった、モダンダンスが社会とどう関わっていくかよく考慮されているとの批評をいただきました。社会とのかかわりなしには生きていけませんもんね。これはずっとテーマの一環として考えていきたいと思っています。
ところで、ずっと自信をなくしていたんです、私…。くじ運に。ここんとこホールの抽選でぱっとしない順番ばかり引き当てておりまして、もう私にはいい順番を引き寄せる力がなくなった、と思っていたのですが、今回発表会のための抽選で3番！！創作実験劇場のための抽選で1番！！をひきました。発表会は10月22日、創作実験劇場は2月25日です。またどうぞよろしくお願いいたします。
責任編集 菊本千永